

過去推量形「～タロウ」と「～タダロウ」の使用実態

—BCCWJの文学作品を資料として—

李 兮然

【キーワード】

過去推量形、～タロウ、～タダロウ、文学作品、使用実態

【要旨】

本稿は、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）に収録されている文学作品を調査資料として過去推量形である「～タロウ」と「～タダロウ」の使用実態を分析するものである。

結果として、まず、前接する語の品詞に関して、動詞や補助動詞が前接する動詞型の場合、「～タダロウ」の使用が好まれるのに対し、名詞を代表とする名詞型の場合、「～タロウ」の使用が好まれる傾向が見られた。また、過去推量形の意味的用法と、会話か地の文かとの間に相互関係があり、「推量」と「不定推量」は「地の文」に多く現れ、「確認要求」は「会話」に多く現れることが確認できた。最後に、経年変化について、1940年代以降、「～タダロウ」の使用数が「～タロウ」を上回るものの、「～タロウ」もまだ使われ続けている等の特徴を明らかにした。

1. はじめに

過去推量を表す形式には、次の例1の「経過しただろう」のような「～タダロウ」形と、例2の「聞いていたらう」のような「～タロウ」形がある。

- (1) あれから四十分は経過しただろう。

OB1X_00302 エーゲ海に捧ぐ 池田満寿夫第一小説集¹

- (2) あのとき間宮も一緒だったから、話ぐらいは聞いていたらう。

PB29_00014 ともだち

¹ 例文は現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）による。下線などは筆者が施したものである。以下同様。

過去、非過去を含めた推量表現の形式をまとめると、表1のようになる。

表1 推量表現の形式

	～ダロウ	～(ヨ)ウ
非過去	(Ⅰ)～ダロウ	(Ⅱ)～(ヨ)ウ
過去	(Ⅲ)～タダロウ	(Ⅳ)～タロウ

本稿の目的は、表1で示したⅢ、Ⅳに該当する二つの過去推量形「～タロウ」と「～タダロウ」の使用実態を明らかにすることである。具体的には、現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下、BCCWJと呼ぶ）における文学作品を対象として分析を行う。

2. 先行研究

推量表現に関する先行研究が数多くあるなか、過去推量形について言及したものとして、沖森（2010,2017）、長井（2008）がある。

まず、沖森（編）（2017:106-107）は、歴史的視野から「～タロウ」「～タダロウ」について記述し、「過去推量では、「たろう」「ましたろう」が幕末から明治前期に用いられていた（中略）しかし、「ただろう」「たでしょう」がこれに取って代わり、明治20年（1887）年以降一般化した」と指摘している。

一方、長井（2008）は終止用法、疑問用法、仮定用法また丁寧形において、「だろう」（本稿でいう「～ダロウ」「～タダロウ」）と「う」「よう」（本稿でいう「～(ヨ)ウ」「～タロウ」）の使用傾向を比較している。その中で、過去推量形について、「活用語に接続する過去推量の表記には「たろう」と「ただろう」の二通りがある。（中略）前者が古い形であり、後者においては次第に顕著になったように見受けられる」（長井2008:331）と説明している。ただし、調査資料は夏目漱石、三遊亭圓朝、森鷗外の作品に限られており、より客観的に推量表現の経年変化を捉えるため、調査資料の範囲や期間を広げて収集する必要性も考えるべきだと思われる。

また、「～タロウ」「～タダロウ」の考察を主眼とした研究ではないが本稿の考察にあたって参考になるものとして、三宅（2010a,b）、白岩（2015,2016）を挙げておく。

三宅（2010a,b）は、意味的用法を考察し、「～ダロウ」を6用法に分類している。このうち、本稿の分析に関わるのは、平叙文、疑問文における「最も原型的な用法（プロトタイプ）」（三宅2010a:10）とされている「推量」「不定推量」と、「「推量」を表すということから拡張したもの」（三宅2010a:46）とされている「確認要求」の3つの用法である。それぞれの定義と例文を下に記す。

推量 話し手の想像の中で命題を真であると認識する。

(3) 「来るのはいつ頃ですか？」

「五時半は過ぎるだろうな。あいつのことだから」 三宅（2010a:11）

確認要求 話し手にとって何か不確実なことを、聞き手によって確実にしても
らうための確認を要求する。

(4) 「きみは、資産家に生まれたら一生気楽に生きていける、そう思ってるだろ
う？」 三宅 (2010a:29)

不定推量 話し手の想像の中で命題が不確定であると認識する。

(5) 大戸はこれからどうするのだろう。これから先もボクシングを続けていか
なくてはならないのだろうか。 三宅 (2010b:59)

最後に、本稿が用いる手法と類似した部分があるものとして、白岩 (2015,2016) を取り上げる。白岩 (2015) は、江戸期から現代にいたるまでの大衆的な文芸作品の会話文をもとに通時的に「確認要求」用法の増加 (図 1) を指摘している。そして課題として、「現在の筆者の手持ちのデータでは、そこまで精査する準備はないが、ダロウ、ウ、マイ、タロウ、デショウといった各形式間の違いについても、検討の余地は大いにある」 (白岩 2016:25) との記述がある。

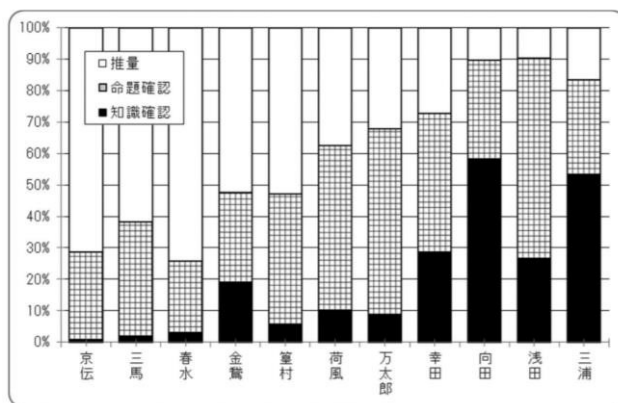


図 1 推量形式の用法の変化 (文芸資料) (白岩 2015:7)

3. 研究目的

以上の先行研究を踏まえたうえで、本稿では、これまで中心的に扱われることの少なかった過去推量形「～タロウ」と「～タダロウ」に注目し、作品の著者を指定せず、文学作品における使用実態について考察していくことを目的とする。

ジャンルを文学作品に限定したのは、年代を通して一貫性を保つためである。他ジャンルに関する考察や、ジャンル間の比較などについては稿を改めて分析したい。

また、考察の項目については、先行研究を参考に、主に前接語品詞、意味的用法、会話・地の文の 3 つの観点から、「～タロウ」と「～タダロウ」の使用状況を考察していく。

4. 研究方法

データの収集に使用したコーパスは BCCWJ で、最終検索日は 2019 年 10 月 2 日である。収集されたデータの範囲は、著者の生年代で見ると、1840 年代生まれ～1990 年代生まれである。

4-1 検索方法及び検索対象

検索方法及び検索対象は、以下のように指定する。

〈検索方法〉

「～タロウ」 キー：指定しない

後方共起：語彙素「た」＋品詞「助動詞」＋活用形「意志推量形」

「～タダロウ」 キー：指定しない

後方共起 1：語彙素「た」＋品詞「助動詞」＋活用形「終止形」

後方共起 2：語彙素「だ」＋品詞「助動詞」＋活用形「意志推量形」

〈検索対象〉

出版・雑誌 教育・学芸（文学／芸術）

出版・書籍 9 文学

図書館・書籍 9 文学

特定目的・ベストセラー 9 文学

4-2 除外対象

より堅実な結果を得るため、翻訳作品、歴史小説の用例を対象外とする。また、執筆者不明、生年代不明、表記不明の用例も対象から外す。さらに、文頭に現れる用例、丁寧表現、方言・古語と関わる用例や、重複、省略、過去推量でない用例も今回の考察の対象外として扱うことにする。

表 2 除外対象について

除外対象	例
翻訳作品	(執筆者) ジョン・ヘイル(著)/後藤 安彦(訳)
歴史小説	(書名・副題) カーマロカ 将門異聞
執筆者不明	(執筆者) 実著者不明
生年代不明	(生年代) (空白)
表記不明	(LBj9_00219 忘れられた帝国) 赤すきんを食べたオオカミを村の人か食べて、きっとケロを吐いた <u>た</u> ろう。

文頭に現れる	(LBm9_00233 覆面作家の愛の歌) 「いつ、どこにかけたかも分かるんですか」 「 <u>だったろう</u> と思います」
丁寧表現	(PM22_00095 新潮 2002年5月号) さぞやご無念でござりました <u>らう</u> 。
方言・古語	(OB4X_00181 蔵) ドイツ語の辞書一冊買って神田へ行き、何軒か回って <u>みたら</u> も、医学の専門書でがんはなかなかにめんどうら。

5. 考察

5-1 全体像

4節で述べた研究方法を踏まえたうえで BCCWJ から抽出した全ての用例数を「文学全体」、除外作業を行った後に残された用例を「分析対象」と呼ぶこととし、集計結果をまとめると、表3のようになる。

表3 BCCWJにおける「～タロウ」と「～タダロウ」－全体像

	～タロウ		～タダロウ	
	用例数	選好率 ²	用例数	選好率
文学全体	1308	43.25%	1716	56.75%
分析対象	856	48.91%	894	51.09%

表3からわかるように、「分析対象」となる「～タロウ」「～タダロウ」の使用に偏りは見られなかった。一方、次の5-2節以降で述べるように、前接語品詞などでは特徴的な部分が見られた。

5-2 前接語品詞

前接する語の品詞を分類する際、形態上の特徴に基づいてまず動詞型、名詞型とイ形容詞型に大分した。具体的な分類と一部の用例³は以下のようなものである。そして、用例数を統計し選好率を計算した結果は表4である。

動詞型	「動詞／補助動詞＋たろう」 「動詞／補助動詞＋ただらう」
-----	---------------------------------

² 2つ(以上)の表現のうち、どちらを選ぶかという傾向を示す数値。この場合、「～タロウ」と「～タダロウ」。

³ 紙幅の関係で、前接語品詞が名詞の場合(例10-13)以外、他の品詞については1例ずつ挙げている。

- (6) (=1 動詞+ただろう)
あれから四十分は経過ただろう。
OB1X_00302 エーゲ海に捧ぐ 池田満寿夫第一小説集
- (7) (=2 補助動詞+たろう)
あのとき間宮も一緒だったから、話ぐらいは聞いていたろう。
PB29_00014 ともだち

名詞型 「名詞/ナ形容詞/副詞/助詞/助動詞+であったろう/だったろう」
「名詞/ナ形容詞/副詞/助詞/助動詞+であったらう/だっただらう」

- (8) (名詞+であったろう)
恐らく千九百七十年にアンコールワットを訪れた外国人は私が最後であっ
たらうと思う。
LBf9_00180 報道カメラマン
- (9) (名詞+であったらう)
幾十回となく洗い晒したものであったらうのに、汚れてはいなかった。
OB2X_00190 生きて行く私 上
- (10) (名詞+だったろう)
そういう母の姿は、むしろ父があつてこそその光景だったらう。
LB19_00018 台所
- (11) (名詞+だっただらう)
昔はさぞかし美少年だっただらうな」
PB39_00481 ナポリ魔の風
- (12) (ナ形容詞+であったらう)
それが一冊の本になったのであるから、どれほど感無量であったらう。
PB19_00034 殺意の接点
- (13) (副詞+だったらう)
二十五の若さで、子供たちを残して逝く無念はいかばかりだったらう。
PB59_00004 海賊丸漂着異聞
- (14) (助詞+だっただらう)
進は三十代の半ばくらいだっただらう。
PB29_00054 夢のかたみ
- (15) (助動詞+だっただらう)
正確にはそういうべきだっただらう。
LBr9_00098 霧の中の頼子

イ形容詞型 「一般イ形容詞／形容詞ナイ／助動詞ナイ＋たろう」
 「一般イ形容詞／形容詞ナイ／助動詞ナイ＋ただろう」

(16) (一般イ形容詞＋たろう)

「さぞ、つらかったろうな」と、部下に半ば詫びるようにいったりした。

OB1X_00048 城山三郎全集第1巻

(17) (形容詞ナイ＋たろう)

そしてその役は私しかなかつたろう。

OB5X_00024 弟

(18) (助動詞ナイ＋ただろう)

「工事課の第七課長代理だよ、まだ会ってなかつただろう？」フジオミは不安げにうなずいた。

LBm9_00036 タイム・リーパー

表4 BCCWJにおける「～タロウ」「～タダロウ」－前接語品詞

前接語品詞		～タロウ		～タダロウ	
		用例数	選好率	用例数	選好率
動詞型	動詞	293	40.25%	435	59.75%
	補助動詞	76	26.03%	216	73.97%
名詞型	名詞	253	83.50%	50	16.50%
	ナ形容詞	8	72.73%	3	27.27%
	副詞	6	100.00%	0	-
	助詞	4	66.67%	2	33.33%
	助動詞	8	88.89%	1	11.11%
	複数あり	41	89.13%	5	10.87%
イ形容詞型	一般イ形容詞	28	42.42%	38	57.58%
	形容詞ナイ	56	50.45%	55	49.55%
	助動詞ナイ	80	47.62%	88	52.38%
不明		3	75.00%	1	25.00%
計		856	48.91%	894	51.09%

表4からわかるように、BCCWJの文学作品において、前接語品詞が動詞型の場合、「～タダロウ」を使用する傾向にある。これに対し、名詞、ナ形容詞といった名詞型が前接語品詞の場合、使用が「～タロウ」のほうに傾くことが伺える。

なお、名詞型の場合、前接語と「～タロウ」「～タダロウ」の間に「デアル」が入る場合と「ダ」が入る場合の二通りがあり、合わせて四通りの形式がある（例 8-11）。そこで、形式別に使用上違いがあるかどうかをみるため、表 5 のようにまとめた。結果として、前接語が名詞型の場合、「～タロウ」「～タダロウ」の間に「デアル」「ダ」のいずれを挿入しても、「～タロウ」の使用が好まれるという結論に変わりがなかった。

表 5 名詞型の「～タロウ」と「～タダロウ」

名詞型	～であったろう		～であったらろう		～だったろう		～だったらろう	
	用例数	選好率	用例数	選好率	用例数	選好率	用例数	選好率
名詞	98	89.91%	11	10.09%	155	79.90%	39	20.10%
ナ形容詞	2	100.00%	0	-	6	66.67%	3	33.33%
副詞	1	100.00%	0	-	5	100.00%	0	-
助詞	1	100.00%	0	-	3	60.00%	2	40.00%
助動詞	2	100.00%	0	-	5	83.33%	1	16.67%
複数あり ⁴	14	100.00%	0	-	27	83.38%	5	15.63%
計	118	91.47%	11	8.53%	201	80.08%	50	19.92%

以上のことを結論 I としてまとめる。

結論 I 前接語品詞について

- 〈動詞型〉 「～タロウ」 < 「～タダロウ」
- 〈名詞型〉 「名詞」との間に「デアル」「ダ」のいずれを挿入しても、
「～タロウ」 > 「～タダロウ」
- 〈イ形容詞型〉 使用上の傾向が見られなかった。

5-3 意味的用法と会話・地の文

意味的用法の分類に関して、2 節で述べたように三宅（2010a,b）に基づき、「推量」「不定推量」「確認要求」の 3 つの用法に分ける。また、用例が会話か地の文かの判断は目視で行った。分類しがたい用例を「不明」と記す。結果は表 6、表 7 である。

(19) (=6 推量)

あれから四十分は経過したたらう。

OB1X_00302 エーゲ海に捧ぐ 池田満寿夫第一小説集⁵

⁴ 『日本国語大辞典』において品詞が複数提示されているもの（例：大変、迷惑等）。

⁵ 例文は現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）による。下線は筆者が施したものである。以下同様。

(20) (=12 不定推量－疑問語を含む)

それが一冊の本になったのであるから、どれほど感無量であつたろう。

PB19_00034 殺意の接点

(21) (不定推量－句末に「か」が付く)

「やっぱり手を振るべきだつたろうか？」

LBh9_00085 スーパー・ゼロ

(22) (=18 確認要求)

「工事課の第七課長代理だよ、まだ会ってなかつただろう？」フジオミは不安げにうなずいた。

LBm9_00036 タイム・リーパー

表6 BCCWJにおける「～タロウ」と「～タダロウ」－意味的用法

	～タロウ		～タダロウ	
	用例数	選好率	用例数	選好率
推量	465	50.00%	465	50.00%
確認要求	166	49.70%	168	50.30%
不定推量	178	45.88%	210	54.12%
不明	47	47.96%	51	52.04%
計	856	48.91%	894	51.09%

表7 BCCWJにおける「～タロウ」と「～タダロウ」－会話・地の文

	～タロウ		～タダロウ	
	用例数	選好率	用例数	選好率
会話	256	52.14%	235	47.86%
地の文	586	49.58%	596	50.42%
不明	14	18.18%	63	81.82%
計	856	48.91%	894	51.09%

表6、表7において、「不明」を除いて）選好率が全て45.00%～55.00%の間にとどまっているのが伺える。それに対し、意味的用法と会話・地の文の相互関係を表8のように整理してみると、「推量」と「不定推量」は「地の文」に多く現れ、「確認要求」は「会話」に多く現れることが分かる。

また、「地の文」に現れる「確認要求」の用例が相手をからかうような顔を描写する例23、24の二例しか見られず、多くの先行研究が指摘した「確認要求」の場合、相手の存

在を必要とするということを改めて確認できた。

- (23) 「いい眺めだね」といった。そしてどうだ、敗けたらうというような顔で、くっくつと笑った。

LBk9_00271 逃げ水上巻

- (24) どうだ、小生意気な口をききやがってこんどは少しおどろいたらうと、いたげな勘六の顔だ。

LBc9_00029 裏町の人生

表 8 意味的用法と会話・地の文の相互関係

	～タロウ			～タダロウ		
	会話	地の文	不明	会話	地の文	不明
推量	54	402	9	35	409	21
確認要求	162	2	2	162	0	6
不定推量	10	165	3	9	184	17
不明	30	17	0	29	3	19
計	256	586	14	235	596	63

意味的用法と会話・地の文について、結論Ⅱとしてまとめる。

結論Ⅱ 意味的用法、会話・地の文について

- 〈意味的用法〉 使用上の傾向が見られなかった。
 〈会話・地の文〉 使用上の傾向が見られなかった。
 〈相互関係〉 多用①推量×地の文 (例 1)
 多用②確認要求×会話 (例 18)
 多用③不定推量×地の文 (例 12)
 (確認要求×地の文はほとんどない)

5-4 経年変化

BCCWJの文学作品における「～タロウ」と「～タダロウ」の経年変化を図2で示す。なお、年代は著者の生年代である。1850年代において両形式とも用例がなかった以外、1840年代から1980年代までの間の変化が把握できた。

まず、1840年～1879年(左4列)において、「～タロウ」の用例しか見られなかった。そして、1880年(左5列目)に入り「～タダロウ」の用例が現れたが、1939年(右6列目)までは50%以下にとどまり、「～タロウ」のほうが優勢であることがわかる。その後、1940年以降(右5列)、「～タダロウ」の使用数が「～タロウ」を超えたが、「～タロウ」

もまだ使われ続けていることも読み取れる。

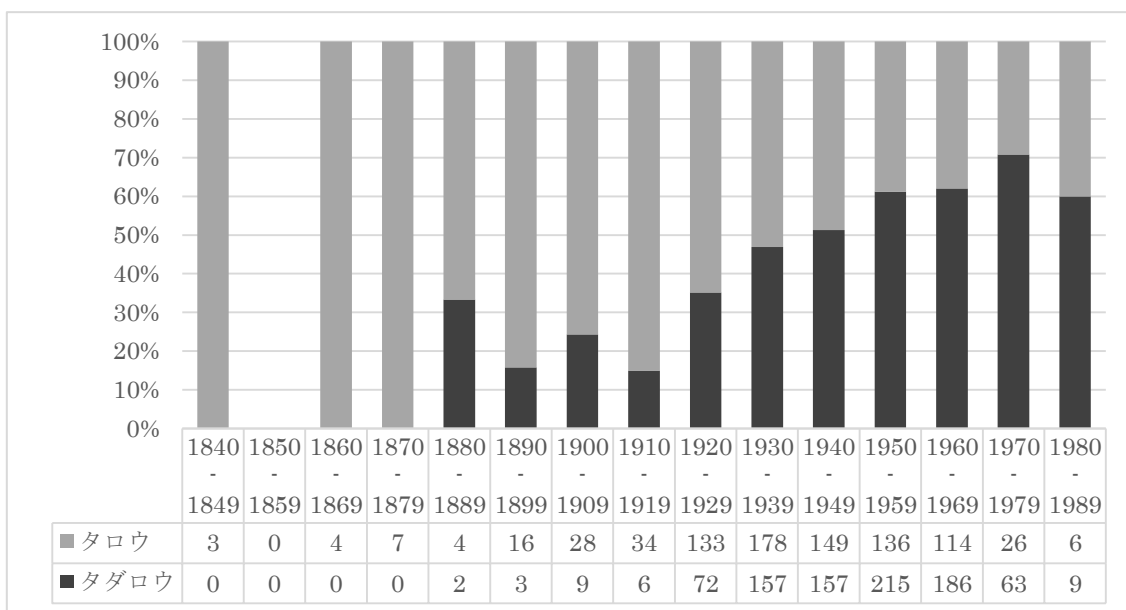


図2 BCCWJの文学作品における「～タロウ」「～タダロウ」の経年変化⁶

以上、経年変化について結論Ⅲとしてまとめる。

結論Ⅲ 経年変化について

- 〈1840年～1879年〉「～タロウ」だけ確認できた。
- 〈1880年～1939年〉「～タダロウ」が現れたが、「～タロウ」のほうが多数である。
- 〈1940年～1989年〉「～タダロウ」が「～タロウ」を超えて多数になるが、「～タロウ」も使われ続けている。

6. おわりに

本稿は、BCCWJの文学作品を対象に、過去推量形「～タロウ」と「～タダロウ」の使用実態を調査した。結果的に、前掲結論Ⅰ～Ⅲが得られた。

しかし、考察するにあたって、分析対象がBCCWJにおける文学作品に限られたため、全体的に把握するには文章のジャンルや年代を広げて考察する必要があると思われる。また、傾向が見られた部分では、どういう理由が考えられるかについての考察も望まれる。これらを今後の課題としたい。

参考文献

浅川哲也・竹部歩美（2014）『歴史的变化から理解する現代日本語文法』おうふう
 沖森卓也（編）（2010）『日本語史概説』朝倉書店

⁶ 生年代が複数（執筆者が複数）の用例は含まれていない。

- 沖森卓也 (2017) 『日本語全史』ちくま新書
- 白岩広行 (2015) 「推量形式の用法の通時変化について—江戸・東京の文芸資料をもとに—」
『上越教育大学国語研究』(29), pp.60-49, 上越教育大学国語教育学会
- 白岩広行 (2016) 「確認要求は増えているか—江戸・東京の推量形式を中心に」『上越教育大
学国語研究』(30), pp.111-99, 上越教育大学国語教育学会
- 長井香奈子 (2008) 「「う」と「だろう」」『国文学 遠藤邦基教授古稀記念特集』(92),
pp.329-354, 関西大学国文学会
- 仁田義雄・益岡隆志 (編) (1989) 『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄・益岡隆志 (編) (2000) 『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (編) (2000) 『日本国語大辞典』
小学館
- 日本語文法学会 (編) (2014) 『日本語文法事典』大修館書店
- 三宅知宏 (2010a) 「「推量」と「確認要求」——“ダロウ”をめぐる——」『鶴見大学紀要
第1部日本語・日本文学編』(47), pp.9-55, 鶴見大学
- 三宅知宏 (2010b) 「「不定推量」と「質問表現」——“ダロウ”をめぐるⅡ——」『鶴見大
学紀要 第1部日本語・日本文学編』(47), pp.57-75, 鶴見大学

使用データ

現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ (最終検索日: 2019年10月2日)

(埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程)